
魔獣士戦録アルラウネ

十三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔獣士戦録アルラウネ

【Nコード】

N6931S

【作者名】

十三

【あらすじ】

魔獣となってしまう彼は死んでしまった親の導きで魔獣を倒す学園に入る。魔獣であることを隠して生活しなければいけない彼は、いったいどのような学園生活を送るのだろうか？

プロローグ（前書き）

プロローグです。すなわち導入です。

まだ始まったばかりなので生暖かい目で見てください

プロローグ

能力と言われた一般人から見れば『異能』と呼ばれた物が少ないながらも存在する大陸、『エンデリオス』

かつて、この大陸に危機が訪れた。今はもう無いであろう、通称魔蝕研究団体『ネメシス』の策謀により密かに開発されていた魔蝕ウイルスが散りばめられた。宇宙研究と開発と言う名目の大量の細菌を積み込んだロケットを打ち上げ、計算された『不慮の事故』で爆破。結果全土に撒かれてしまった。

幸い、散布計画発動寸前で情報が漏れたため、人類滅亡までとは行かなかった。

しかし、数多あまたの人間や動物が魔蝕ウイルス、『アリスノテトラ』に感染し、数日後にはもはや私達の知る『生き物』では無くなっていた。現在の人口はかつての十分の一にまで減少しただろう。ただ、細菌は動物に感染しなければすぐに死んでしまうのが欠点だ。

政府は、この事態を解決しようと様々な手を打った。魔蝕ウイルスに汚染された生き物『魔獣』を確保して調べようとしたり、ワクチンを作ってみたりしたのだ。しかし、思ったよりウイルスは強く科

学者が被験体から感染し使い物にならなくなったりワクチンを読み取りそれに抗生反応を示すようになる成長型ウイルスだと判明した。

唯一の朗報は細菌は動物に感染しなければすぐに死んでしまうぐらいだろう。

そんなことが判明している最中でも一つ、また一つとウイルスによって国は消えていく。人が生き物でなくなる。

最悪の事態になった政府は最後の計画を発動した。それは、プロジェクトコードナンバー0『アルラウネ^{ゼロ}』

これは本当に追い詰められた最後の計画。最新城塞都市『アルラウネ』を建て、完全に隔離する計画だ。

しかし、その計画は他の国との交流を絶ち切り、見捨てなければならぬ。

しかし、前代未聞の大危機を前に選択を迫られる政府。そして、政府はその計画を実行した。

そのことが起こって三年後。最新城塞都市アルラウネは完成し、その中に結構な住民がいる。そして、アルラウネと同時に進んでいた計画があり、その計画も成功を収めた。

裏で進められていた計画。プロジェクトコードナンバー02『グリーンハウス』ゼロツー

最近の研究で、脳の使われてない一部分を開発する事によって莫大な力を引き出せることが判明。それは後に能力を使うことが出来る呼ばれる異能者の誕生だった。さらに、実験により異能者の持つ力、後の『魔力』を保持しているのなら魔蝕感染した動物からは感染はしない事も判明。

この二つの計画の成功により、魔獣に対抗することが出来るようになった。

この最新城塞都市アルラウネにある異能力者の為にある学校の一つ『星聖学園』はいつもエキサイティングでバイオレンスに溢れている。なんせ生徒全員が異能力者だ。当たり前だが。しかし、それ故にかなり学年能力内格差が激しかったりするがその学園の生徒曰く『楽しすぎてヤバイ』らしい。

「此処が『星聖学園』かあ……………」

そんな『星聖学園』にひとりの転校生が来るようだ。彼の名は五和いっわ
だりゅうじ田劉二。今は校門の前で学園の校舎を見ている。

「俺の親父が最後に残してくれた物、か」

五和田劉二は一枚の書類を手を持ちつぶやく。その書類はこの『星聖学園』の転校入学受付に関する書類だ。

「…………行くか。俺の両親の仇を取るために……強くならなければいけないんだ。それこそ、異能力者を凌駕するほどに」

最後の呟きは風に流されるぐらいの小さな声。そして、拳を握りしめ、何かの決意を表した。その決意は何だかは本人のみぞ知る。そうして、五和田劉二は校門をくぐり抜けた。

プロローグ（後書き）

十三です。ネシンバラではありません………って分かりませんよね
まだ特に書くことは有りません
何卒よろしくお願いします

学園生活始まつ……てないね(前書き)

ま、まあ特に書くこと無いかな

学園生活始まっ……てないね

「あー君が五和田君だね？」

「はい。五和田劉二です」

「ふむ………おーけー。早速だがこの学校で能力が必要となる以上、君の能力とどれぐらい使えるかが知りたい。こちらは審査の人を呼んで来るから先に体育館に行ってくれ」

「分かりました。体育館はこの通路を真っ直ぐ行った突き当りを左に曲がってそのまま進めば良いんですね？」

「おーおーもう頭に地図が入ってるのか。すげーなオイ………まあ完璧だ。では、俺はここで別れるよ。じゃあな」

「ええ、さようなら」

五和田劉二は先ほど自分が言ったその通りの道順を歩むべく歩き出した。

城塞都市アルラウネの中にある異能力者のための学校『星聖学園』の校舎に入った五和田劉二は書類に書いてあった通り、今職員室にて話を聞いた。

説明してくれたのは別クラス担当の『あかのねゆうざん赤野音勇山』先生だ。たまたま職員室にいた先生がこの人だった。見た感じかなりテキトーである。

「此処だな体育館は……いや本当にそうなのか此処……？」

数分後、劉二は体育館に着いた。入ってからの一言目が、

「……なんだこの広さ……」

とにかく、広かった。校門から見たときは校舎の影に隠れて見えなかったが来てみると凄い。校舎より広くは無いがそれでもかなりの広さを誇る。ふと、天井を見上げると快晴。天上の開け閉めが出来るらしく、今日から三日間ぐらいいは晴れだと聞いたのでそのせいだろう。オープンになっている。

「おー先に来ていたか」

解放感に少しの虚無感を満喫していた劉二の耳に先ほど聞いた声が聞こえる。赤野音雄山の声だ。劉二は聞こえる方角に顔を向ける。

「ええ、来ました」

答えた劉二の視線の先、赤野音雄山と白衣を来た女が二人と男が一人。さらにその後ろには髭を生やした爺さんが一人。そのうちの一人、白衣を来た長身の長い金髪を持った女は劉二に近づき話しかけた。

「貴方が転校生？」

「そうです。五和田劉二と言います」

「私が能力審査のルーイン・エンゼラート。ルイで結構よ。……で、後ろで機械を組み立てているのが……まあ、助手みたいなので、ヒュイヌ・リユリユ。………ヒュイヌ！」

「……は、はひ！？」

「挨拶しなさい」

「す、スイマセン！えーと、同じく能力審査のヒュイヌです。よろしくお願いします」

「あ、ああ……よろしくお願いします」

後から顔を出して頭を下げてくれたのはヒュイヌ・リユリユ。あまり背は高く無く、茶色のショートでくせっ毛である。タイミングを見計らった雄山が間に入る。

「んじゃ、ヒュイヌがセッティング終わるまでの間能力審査の事について話す。よく聞いとけ」

「分かりました」

そして雄山の講義が始まった。

話を纏めると、此処での能力審査は大きく分けて『種類』、『完成度』、『戦闘応用』の三種類を見ていくらしい。

種類とは、能力自体の事である。例を挙げるなら『念動力』^{サイコキネシス}や『霊媒具現化』^{ビテュアリズム}、『ビット射出能力』などだろうか。そう言った固有名だけでなく、剣が上手く使えたりするのも些細ながら立派な能力である。しかし、評価は上にあげた物が高いだろう。

完成度とは、その能力をどこまで使えるかの度合いを示した物。た

とえ、能力がいくら強くてもそれが上手く使えなければ所詮それまで。評価はかなり低いだろう。また、能力が『剣が使える能力』など種類で評価が低い者でも完成度を突き詰めればかなりの評価がもらえるのだ。事実、学校で能力格差順位、で上位の内何人かは平凡な能力でかなり突き詰めた者が居たりする。

最後に、戦闘応用だ。これは字の如く完成させた技をどこまで実戦で使えるかの事。専ら、これの審査方法は『対決』。二人が能力を使い、戦うのだ。審査員がその戦闘を見て判断するのだという。ただ単に相手にダメージを負わせるだけでなく、回避の仕方、技の不発の際の対処、戦法など様々な観点から見るといえるのだという。

ざっとした講義が終わり、少ししたところでヒュイヌがセッティングを終えたようだ。

「ルイ先輩！セッティング終わりました！」

「ありがとうヒュイヌ。じゃ、早速始めるけどいい？」

「あー……はい」

流れで返事をしてしまった劉二。実は、一つ、メチャクチャ重要な問題があった。

「(……………やっべ、能力どうしよう……………)」

劉二は、一切能力をどうするか考えていなかった。

「(こんな能力おっぴらに出すものじゃ無いと言うか……………ま
ずこれ能力じゃないし……………あー……………やばいやばいやバイ)」

脳内、パニックである。何故なら、彼の能力は――

学園生活始まつ……てないね（後書き）

十三です

二話目ですがまあよくありがちな終わり方です
これから何卒

能力試験（前書き）

今回は能力ちよこつと。

能力試験

メタモルフォーゼ
『獣変動』

それは禁忌の能力。

忌み嫌われた魔獣と化する能力。

人間の遺伝子に魔蝕ウイルス『アリスノテトラ』が混ざった為に起こる現象。

本来、アリスノテトラに感染した人間は忽ち^{たちま}心を失い、体を失い、魔獣となり人を殺し、別の魔獣を喰らい、強くなろうと本能のあるがままに生きる。

しかし、人間にも若干の耐性が付いていることもある。そう言った場合、感染して一週間や一ヶ月後に発病する。これの怖い所は感染した本人に全く症状が出ず、いきなり魔獣化するそうだ。夜、皆で家族団欒の時を過ごしていた時、親がいきなり魔獣化して悲劇を生んだ家庭も少なくない。

魔蝕研究団体『ネメシス』は魔獣の人間を作ろうと数多の人間を攫い、非人道的な実験を繰り返してきた。五和田劉二の親もその一例に入る。

子供の遺伝子に魔蝕ウイルスの遺伝子を組み込んだり、魔蝕ウイルスの入った液体に漬けたりなど、悍ましい実験おそをしてきた。が、一人を除いて全て失敗に終わった。すぐに魔獣化するか先に人間の精神が体が耐えきれなくなるのだ。

唯一成功した人間。それは、五和田劉二だった。

彼は、実際に魔蝕ウイルスを打ち込まれたのではなく、打ち込まれた親から生まれたのだ。

妊娠中の親が攫われ、魔蝕ウイルスを打ち込まれたところ耐性が存在したため親はすぐには魔獣にならなかった。しかし、すぐにはならないだけで、母親の体全身をウイルスは蝕んだ。胎盤にいるこれ

から生まれて来るであろう子供ですら例外無く。

感染してから幾許か日数が過ぎた頃、子供は生まれた。親は、劉備玄徳の頭を取って『劉二』と名付けた。

それから、劉二は成長し、こちらで言う『高校一年生』ぐらいの年になった。ある時、劉二の父親は一枚の紙を書いていた。劉二は父親にその紙が何かを聞いた。父親はただ笑うだけで答えてくれなかった。

そして、悲劇が生まれた。

劉二の両親が、魔獣化してしまった。

劉二はその光景を目の当たりにし、目を見開いて動けなかった。

魔獣にもはや人間の心在らず。そのまま両親で無くなった両親は劉二に向き、巨大な口を開いた。

劉二は後ずさるが、すぐ後ろは家の壁。追い込まれた劉二。そして、二体が襲い掛かって来たその刹那―劉二が絶叫した。それは人の声では無い。生まれる前から本能に根付いた魔獣の雄叫び。劉二の体が妖しい耀^{ひかり}に包まれ、次の瞬間、目の前の魔獣、もとい両親はバラバラになっていた。

劉二は自分の体を見る。そこにもはや自分の影は無い。シロの濁った水晶に包まれた強靱な胴体に二本の長い太刀を持つ腕。底から湧き出る禁忌の力。絶たれるべき命亡き者。

その魔獣の名は、絶将『イナニメトネス』。

五和田劉二、現イナニメトネスは聞いた者は恐怖に陥れる雄叫びを上げた。そして、普通の劉二に戻る。彼は、慟哭していた。誰も、彼の涙を止められる者はいない。

劉二は、落ち着きを取り戻した所である物を見つけた。それは、前に父親が持っていた紙であった。劉二は紙を手取る。そこに書かれていたのは『星聖学園転校受付書類』

劉二は知っていた。星聖学園とは、魔獣を殺すためにある学校だと。彼は、憎んでいた。親をこうさせた魔蝕研究団体『ネメシス』やそれが創り出した在ってはならない生物『魔獣』を。

劉二は決心した。この学園に行き強くなり、魔獣を殺そうと。そして、最後に自分も死のうと。

死んでしまった、両親の為に。

「よし、始めるわ。まず、能力名は分かっていたら教えて。分からなかったら概要を」

焦る劉二の事など知らずにルーインは言う。

「ええっと……その……俺は………」

これはヤバい。急いで考えないといけない。考える劉二。刻々と迫る時間。

「?」

疑問符が頭に浮かんでいるような感じのルーイン。

「えーとー……（あー……もうこれでいいや!）」

やけくそになった劉二の答えは、

「俺は、まあ、アレです。剣がとりあえず使えるのと創り出せます」

彼の魔獣の力で生み出すことの出来る剣、絶現剣である。剣術は魔獣のやり方で済まそうと考えた。

「あ、そうなの?じゃあ、ちょっと見せて頂戴」

後ろでヒュイヌがコンピューターに打ち込んでいる。ルーインに言われた通り劉二は『能力』を見せた。

「分かりました……………それ！」

劉二が右手を突き出す。それだけで、瞬間的にシロの、濁った水晶の様な色をした長い太刀が出現した。かっこつけて決めポーズを取る劉二。

「へえー……………ただでさえゼロから物を作るのは難しいと言うのにあの速さで型を形成するなんて……」

「え？なんか言いました？」

「ん？ううん気にしないで。完成度もかなり高いし……ねえ、ちょっと良いかしら？」

「はい？」

「あのね……ちょっとやって欲しい事があるのよ。簡単だから」

「はあ」

「それじゃ説明するわよ。まずは……………」

それから十分後、

「出来ました」

「御苦労さま。じゃ、早速出来そう？」

「大丈夫です」

体育館内。そこには、不規則に置かれた魔獣をモチーフにしたであろうシルエットの物が置かれてる。

ルーインの説明によると剣術を扱う者は不規則に置かれたターゲットをどれぐらいの速さですべて破壊できるかを計っていたりする。一応劉二も受けてもらう事にしたのだ。

劉二は並べられたターゲットを見渡す。『視た』感じ、それぞれ堅さが異なり連撃に持ち込みにくい配置となっている。今、劉二の目は人間の目では無い。魔獣の目で物を確認した。

「はいそれじゃ良いかしら？」

「いつでも！」

そう言いつつ劉二は刀を創り出し順手で構える。ターゲット破壊の手順をイメージする。撃破最短ルートを見出す。

「4.....3.....2.....1.....」
ファイア ドライ ツヴァイ アイン

全神経をカウントダウンに集中する。そして、ルーインは叫ぶ。

「0^{スル}!!」

劉二は全速で駆けだした。

まず手始めに手前に並んだ三つのターゲットをすれ違い様に斬り捨てる。そのまま近くにある堅い四つ目のターゲットを峰打ち。峰打ちによってターゲットは壊れこそしないが吹き飛び少し遠くのまた堅いターゲットに飛ぶ。劉二は太刀を狙って投擲。まるでそうで無ければいけないかの様に飛ぶ太刀は二つの堅いターゲットを貫通。綺麗にターゲットは分かれた。武器が無くなった劉二。武器が無くなれば作ればいい。劉二は走りながら右手に太刀を生成。そのまま

「はああああっ！」

気合と共に一閃。波動が、ターゲットを破壊する。ついで目の前にあった一番堅いターゲットを斬り上げ。空中に飛びあがったターゲットに劉二は刀を投擲。突き刺さった所で

「爆^{explosion}発！」

その声と共に太刀が爆発。ターゲットはバラバラになって降ってきた。

「……………」

ルーインとヒュイヌ、雄山は咄然。ターゲット撃破時間、三分。全員、鮮やかすぎる劉二の戦闘に

ハッと我に返ったヒュイヌが急いで戦闘状況を打ち込む。雄山がなんだこの転校生と呟いており、ルーインが

「……す、凄いじゃない！あの投擲の命中力！」

「え、ええ、まあ」

まさか魔獣眼を使いましたとは絶対に言えない。口が裂けても腹に仕舞込まなければ。

「と言う事で、試験は終わり。お疲れ様でした」

「ええ、ありがとうございます」

「こちらこそ……ヒュイヌ、打ち込み終わった？」

「もうちょっと……ええ、終わりました。向こうで解析データ出せますよ」

「ご苦労ヒュイヌ……じゃ、私達はこれで。次の事はその雄山先生に聞いてね」

そう言って、てきぱきと機材をかたし、体育館を二人は後にした。

雄山曰く、一応校長にも顔を出しとけと言う事なので次は校長室、校舎内四階の奥の高級そうな扉にあるという。高級そうな扉ってどんな扉だよ、と些細な疑問を残しながら劉二と雄山は校長室に向か

った。

校舎内四階。劉二と雄山は校長室前に居た。

「あーここが校長室だ。無礼の無いよーにな？」

「は、はい」

「んで、そろそろ俺は戻っから、まあ、頑張れ」

「はい……え!？」

「あーこれでも授業は有るんだよっ」

と肩に手を置かれた後過ぎ去ってしまった。一人残された五和田劉二

「……………」

校長室の扉を見て深呼吸。

「すー……………はー……………よし、行こう」

劉二はノックして校長室に入って行った。

能力試験（後書き）

トウーサンです。ネシンバラではありません

二百行で纏めきりたかったけど無理だと言うこの駄文さ

イナニメトネスは東方projectのアリス・マーガトロイドの
スペルカード、魔操『リターンイナニメトネス』から。元々命亡き
物の意

・・・・これは二次創作に入ってしまうのが疑問
ではここらへんで。また会える時まで

初授業は模擬戦！？（前書き）

今回は題名の通り模擬戦です

初授業は模擬戦!?

校長室の中は少し狭く、テーブルを挟んでソファがあり、それぞれ後ろには数多の分厚い本が入っている本棚、そして入ってきた劉二の視線の先に、椅子に座った何とも重鎮と言えそうな老人と、スーツを着た女性が立っていた。

「し、失礼します」

劉二は緊張しながら二人に挨拶をした。

校長と思われる老人は外見の割に優しい口調でそのソファに腰を下ろしなさいと言った。劉二はその言葉に甘え、ゆっくりと腰を下ろした。老人は劉二が腰を下ろしたのを見てから動き、少々危なっかしい動作で劉二の向かい側に腰を下ろした。スーツの女性も老人の隣に無駄の無い動作で腰を下ろす。

「え、えと、本日転校してきたいいい五和田劉二です。ねね年齢はそのひょうななひゃ……痛ッ!」

「やれやれ……少年よ。落ち着きなさい」

「くすつ……」

緊張マックスで先走りだした劉二を見て少々呆れた老人とそれを見て笑う女性。落ち着けとの言葉を聞いた劉二はハッと我に振り返る。

「す、スイマセン……………」

「改めて、君が転校生の五和田劉二君かね？」

「はい。五和田劉二です」

「ふむ。私がこの校長を務めている『火雅修大』かがしゅうだいだ。まあ、主に校長と呼ばれておるから名前はそう意識しなくても良い」

「は、はあ」

「そして、私の隣におる人が、」

「担任の、『大原薊』おおはらあざみです。よろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします」

校長先生が火雅修大校長で、担任が大原薊先生だ。名前を頭の中で三回復唱して憶え直す。その後、校長がこの学校の説明と軽い歴史、付け加えて劉二が泊まる事になるであろう寮の場所を説明してくれた。話し終えて一息ついた所で火雅校長が薊に、

「薊君。少々席を外してくれんかね？ ちょっと彼と話があるのだよ。ほら、そっちもクラスの生徒に教えたり『アレ』の準備があるだろう」

「?……そうですね。『アレ』もありますから。ではここで私は失礼させて頂きます……………教室でまた会いましょう、劉二君」

そう言って担任、大原薊は退出した。

部屋に残った劉二と火雅校長はしばらくの間何も喋らず、静寂が空間を支配した。時間とともに高まる緊張。劉二は何を言われるかわからない。それが、自分の心拍数を高くしているようだ。そして、火雅校長は口を重く開いた。

「……劉二君」

「は、はい!?……………スイマセン。何でしょうか？」

思わず声が裏返ってしまった。これは失態。急いで言い直した。老人は、その動作を笑いもせず見過ごし、再び口を開く。

「……私は、実は君の親と面識が有ってね、劉二君。否……………絶将『イナニメトネス』」

「!!!」

「君の親、お父さんの方だね。私は、知り合いだったのさ……………だから、君の家の事情は知っている。両親とも、ネメシスに攫われた事も。そして君が『魔獣』の血を引いていることも」

劉二は黙った。余りの事実と自分の正体の情報流出に何を言えば良
いか分からず、黙る事しか出来無かった。

「安心せい。私は口外にするつもりはさらさら無い。それだけ伝え
ときたかつ……。まだ言う事があったわい……。最後に、
私からの願いだ。否、私と、君の両親からの願いだ……。今
を、生きろ」

「……今を……。生きろ……」

「自分の運命に絶望せず、死のうとししないで生きろと言う事じゃ。
私が、この学園に転校を許可したのもその為じゃ。私が校長と知っ
た君の父親は私に頭を下げてこう言った。『息子に、楽しみを与え
たい。だから、お願いしたい』とな」

「俺の……。親父が……」

「まあ金の問題なら校長権限で何とかする。こんな話の後で悪いが、
この学園で生活を楽しんでくれ。何かあったらまあ私に聞いてくれ。
話は以上だ」

「……最後に、一つ良いですか？」

「なんじゃね？」

「『アレ』って何ですか？」

「ああ、担任の薊君と話していた奴か。百聞は一見に如かず、教室に行けば全容がわかる。因みに七組だ。場所は分かるかね？」

「ええ、まあ」

「宜しい。ならば行きなさい」

退室指令が出たのでその通りにするしかない。劉二は失礼しました、と頭を下げ校長室を後にした。

「……………とんだ学生さんが来たもんだ。さて、どうなることやら」

笑いと共に発された言葉を聞くものは誰もいない。

星聖学園校舎内三階七組教室前。五和田劉二は扉の前に佇んでいた。来たものは良いものの、どうすれば良いかさっぱりだ。このまま入っていいのか、それとも待機するべきか。二択を迫られた劉二。とりあえず、気分を落ち着けるために深呼吸をしよう。多少は落ち着くが何と言っても初教室だ。これから自分はIn・the・教室と考えるとどうしても落ち着いていられなくなる。迷った挙句、劉二はノックだけする事にした。とりあえず、コンコンコンと三回扉を叩く。すると、

「はぁーい……あら、転校生くん。校長とは話が終わったのね」

先ほど校長室にいた担任、大原薊が出て来た。

「ええ、終わりました」

「皆も待ってるから、さっさとお入り」

そう言って、薊は横にずれ劉二に道を譲る。劉二は一回大きく息を吸い、吐き出してから決心して教室内に入って行った。

騒がしい教室。転校生が入って来たことで、教室内は一気にざわめき出した。まじまじと転校生を見ている者が居れば一目見ただけですぐ顔を下ろして別の事をし始める人も。また、『転校生キター！』『やあ、アレが噂の転校生ね！？』など声も聞こえる。ざわめきが時に連れて大きくなり本格的にうるさくなりそうになった時だ。

「お前らあ！^{やかま}喧しいわ！」

席に座っていた大男が声を荒げた。教室はその声で一気に静まり返った。鶴の一声である。

「騒がしくすると、転校生がどうすれば良いか分からんだろう。こは一つ、静まるんだ皆」

そう言って席に座った。皆が『は、はい……………』など自粛して大人しくなる事からこの教室のドンだと予想する。皆落ち着きを取り戻せた所で薊が転校生に片手で謝り、

「いやーヴァルド君助かるわあー」

「転校生の前で無礼を見せてはならん。生活に慣れたら構わんがな！」

『いいのかよ!!』

ヴァルドと呼ばれた大男は皆のツッコミを笑って回避。いつも通りの空気に戻ったので薊が劉二に自己紹介を促す。^{うなが}

「えー……皆さんこんにちわ。名前は五和田劉二。五の和むの田んぼの田に劉備玄德の劉と漢数字の二で五和田劉二です。年齢は十七歳……こんなものでいいかな？まあよろしくお願いします」

『おぉー!』

皆から声上がる。何故だかは分からないがきつとアレだ。ノリだ。劉二はそう自分で解釈。

「あーっと、席は……あそこらへんで。……じゃあ、私達薊組の自己紹介ね」

アバウトに薊に指された場所ら辺で余っている席を見つける。劉二はそこに座った。タイミングを見計らって自己紹介が始まった。

皆の自己紹介後、時間が来たようなので昼休みになった。そこで劉二は思いもよらぬ事実を聞いた。

「も、模擬戦!？」

「そう、模擬戦」

昼休み後、体育館で『トーナメントで模擬戦』をやる事になっていた。勿論劉二も参加前提である。薊曰く、能力審査で『応用戦闘』は担当がしっかりと見ておかねばならず、そこから今後の課題と訓練内容を作るらしい。しかも、この時期は成長時期で皆自分の实力を知るためにも行われる。劉二の实力と皆の成長を見るためにも今日の午後と明日を費やしてやっしまおうと言う事だ。能力を悟られてはいけない反面、皆の戦い方がどのようか見てみたい気

がする。それ故、劉二はちよつと躊躇ためらいながらも出る事にした。昼休みはそのための戦闘の訓練にしてもよし、飯食つてもよし、昼寝していてもよしとの事。劉二は自分で買ってきた飯を食べ、少々学校内を回ってから向かう事に。

体育館にギリギリ間に合った劉二。本来、そう言った約束事はキツチリ守る方だったのだがこれには訳があった。道に迷った劉二に同じクラスメイトだった間日陰相夜まひかげそうやに道順を教えてもらったところ見事に騙されたのだ。体育館とは逆方向に向かっていた事を別のクラスの子に教えてもらいやっと気づき、そこから最短の経路を教えてもらった。そこから大ダッシュで何とか間に合った。

「はあ……はあ……間に合った」

「あれー遅かったじゃない劉二君」

体育館の門の近くにいる担任の薊が声を掛ける。劉二はお茶を濁してやり過ごした。ふと目を前にやると壊れた機械、タイヤがあるの
でバイクだろう。それが散らばっていたり岩が転がっていたりなど
様々なジャンクが存在する。いったいどうやってこんなもん引っ張
りだして来たんだ？

「ふふふ、凄いでしょ？体育館の床下はこうなってるのよ」

薊がしれっと解説する。予想するに体育館の床が開いてこの地形が
せり出したのだろう。劉二は改めて凄い学校だと実感する。時刻は
一時五十八分。

「さあ、もうすぐ時間よ！初めの二人、所定の位置に付きなさい！」

薊が声を上げる。すると、二人がお互いジャンクを挟んでの位置に
着く。一回戦の予選が始まろうとしていた。見た所、男は鉈を二、
三本所持、対戦相手の女は手に一本の杖。魔術を使うのだろう。

ルールはいたって簡単。相手が降参するまで戦う、ただそれだけ。

降参は自分の判断です。そして降参を申し込まれた人は先生の判断の元、それを認めなければならない。しかし、話を聞くと本当にボロボロになるまでしか降参しない人や相手の動きからすぐに降参を申し込む人様々だ。劉二は、魔獣されど人間。出来るだけ傷つけないは無いのである程度戦ったら相手に降参を促す作戦で行くことにした。

「それでは……………始め！」

時刻は二時丁度を示した。薊の鋭い声と共に、試験と言う名の戦闘バトルは壮烈な戦いを始めようとした。

その試合は、女の風魔術で男を吹き飛ばし、男の落とした鉈を魔術師の女が突き付けて勝敗は決まった。男が降参したのである。戦いは男が勝つだなんてそんな常識は通用しない。その現実を見せつけられた劉二は燃え上がって来た。

そして、とうとう劉二の試合になった。相手は普通に男である。その男をよく観察すると、腰に円状の鉄の輪が五個所持していた。模擬戦用に周りにはゴムが付けられている。劉二は投げて使うのだろうと予測。

ご丁寧に、男は武器を取りだし人の少ない方に投げた。すると風を切る音を鳴らして飛び、ある程度飛んだところでUターン。男は帰って来た鉄の輪を器用にキャッチ。

「君が転校生の五和田劉二か。残念だけど、ここで君はこの？メタルディスク？に予選で負けてもらう！」

「良いところ無しで敗退はしたくないね。甘く見るなよ！」

お互いに燃える闘志をぶつけた後、薊が旗を構える。位置につけ、の声で劉二と男はジャンクを挟んで位置に。そして、睨み合う。緊張感が体を突き抜ける。その緊張が最高点に到達した時、

「始め!!」

薙の鋭い声と共に、戦闘^{バトル}は始まった。

男は、素早く手に持った鉄円盤^{メタルディスク}を一つ投擲。それは劉二に向かって高速で向かう。劉二は薙の声と同時に右に身を飛ばした。しかし、これは男にとって想定済み。初め投擲した鉄円盤^{メタルディスク}を少し左に狙って投げたため劉二の本能は安全な右を選んで飛ぶ。そこを狙って男は劉二の飛ぶであろう方向に向けて大きく回転するように投げた。

案の定、予測されて投げられた鉄円盤メタルディスクに対し劉二は驚きながらも回避。しかし、

「うおっ！」

一枚目の鉄円盤メタルディスクが頬を横切った。もう少しで酷い摩擦に見舞われすり切っていた所だろう。

「くっそ……………どんだけ制御力高えんだよ……………」

「はっ！魔力で制御しているからこんなもん自在に操れるわ！」

男は魔力で鉄円盤メタルディスクを制御している。それ故、軌道が読まれているのである。これでは迂闊に近づけない。さらに男は二枚追加投擲。ステージ全体を空を切るように飛び回る円盤に対し、劉二はジャンクに隠れてやり過ごすことしか出来ない。

「……………ちくしょう、どうするか俺……………」

劉二は回避しながら必死に考える。何か、何かいい方法はないか……………

一度前に攻めてみた劉二は飛んできた鉄円盤メタルディスクを避け動作に入ろうとした瞬間に別のディスクが飛んできた。動作を諦め、回避に移った時にはすでにまた別の鉄円盤メタルディスクが飛んでくるのだ。その繰り返しにな

りかねないのでジャンクの中に隠れていたのだ。

ふと、劉二は目を移す。メタルディスク鉄円盤が貫いた岩の後を通り過ぎたのを見た。

「（……………そうか！……………なら、これで行けるか！）」

ジャンクに隠れていた劉二は気づいた。あの男の投げるメタルディスク鉄円盤の軌道が正確な理由。それは――

「防戦一方だな」

本戦への出場を獲得したヴァルドは劉二の試合を見て小さく呟く。
劉二は必死に鉄円盤^{メタルディスク}避けている。

「彼の能力はなんですかね……………」

隣に、槍を持った長い髪の女が立った。その持つ槍は穂先が二手に分かれている『片鎌槍』と呼ばれた独特の武器だ。そんな物騒な物を携^{たずさ}えている割には雰囲気^{たいふき}が暖かい。

「それも今、明かされるだろう。しかし、あいつはこのカラクリに気づくと思うか？」

「……………分かりません。気づいたらそれなりの資質があって、気づかなかつたらそこまでの男です。しかし、気づいた所でどうすることも出来ないでしょう」

「ふ、お前らしい意見だ」

ヴァルドはすこし笑った。そして、試合を見る事にした。それに続き女は前の光景に目を移す。その瞬間――

劉二はいきなりジャンクから飛び出て前に踊りでる。それは言い換えれば自傷行為に等しい事だった。そんな光景をアラスとシェリアは目撃する。

「は！？おい、自傷行為だぞ！！」

アラスが焦って声を上げるがそれをシェリアが宥める。と言う物のシェリアの心の中は驚愕していた。あの飛び回る鉄円盤メタルディスクの中に身を投げ出すのはおかしい。

しかし、次の瞬間アラスとシェリアは有りえない光景を目にする。

「憶えておきな！俺の力を！！」

前に躍り出た劉二。その瞬間、右手を突き出して手に一本の太刀を形成。そのまま回転動作に入り、

「うらぁ！！」

自分の周りを一回転薙ぎった。それに吸い込まれるように飛来してきた四枚の鉄円盤メタルディスクはキンと甲高い音を立てて全て弾き飛ばされた。劉二はそのまま啞然としている男に向かって身を低くして走る。ハッとながらに返って五枚目の鉄円盤メタルディスクを構えるが時すでに遅し。太刀を首筋に当てられていた。

「いやあ、驚いたぜ。まさか行動範囲を徹底的に洗い出して動けなくさせるような軌道を描いて飛ばすなんて大したもんだ……………降参、してくれるかな？」

「……………こ、降参だ……………」

男は鉄円盤メタルディスクを落とし悔しそうに両手を上げる。それが勝敗の決め手となった。

男は、魔力を流し込みディスクを自由自在に操れこそはするが本格的に動かすのは一枚が限界だった。そこで、男はある動作の直後に動ける範囲を徹底的に洗い出し、辺りこそはしないものの動作を制限するゾーンを割り出したのだ。固定軌道に飛ばすのは容易い。その軌道に飛ばし、ジリ貧を狙って勝敗を付けるのが作戦だった。

これに気づいた劉二は同時に四枚が通過するポイントを予想。何度か見ている内に中心で交わる事が判明。あとは簡単だ。中に行き四枚同時に叩き落とす。脳内で再現することは簡単だがいざ実際にやるとなると難しい。しかし、劉二はやったのけたのだ。

「ぐおおおお………疲れたー………」

寮の一室。劉二は自分に与えられた部屋のベッドに寝ていた。なんせ今日は来て早々模擬戦だ。疲労が溜まるのも無理は無い。

あの後、どうにか連戦を勝ち抜き、本戦への出場を獲得した。しかも予選は全て太刀一本で抜けられたのが幸運だ。劉二は太刀一本でこの予選を勝ち、本戦でピンチになったら爆発能力や二刀流になったりする作戦でいた。いわば相手の虚を突いて勝ちをもぎ取ろうと

していたので予選だけは太刀一本で抜きたかったのだ。

「しかし、ホントに強いなあ皆……甘く見ていた」

劉二がつぶやく通り、まさか予選一発目であんなに苦勞するとは思わなかったのだ。二回戦三回戦も相手の魔術などに苦勞しながらもなんとか勝ちぬけた。

「だけど、本戦はこれ以上の実力を持っている人がいるんだよなあ………」

不安で思いつきり溜息を出す。しかし、戦う前からくよくよしては意味無い。劉二は頭を振って不安を追い払い、そのままベッドの毛布を被って眠りに落ちて行った。

初授業は模擬戦！？（後書き）

十三です。

今回は模擬戦でした

次話を書く前にキャラクター設定を書こうかと思っています

クラスメイトの仲間たちの事です。

それではまた

アルラウネにおけるキャラの紹介（前書き）

キャラ紹介です。特に読まなくてもいいのですが一応目を通していただけると幸いです。

アルラウネにおけるキャラの紹介

五和田 劉二（いつわだ りゅうじ）

城塞都市アルラウネにある異能力者のための学校、『星聖学園』に転校してきた獣変動^{メタモルフオーゼ}出来る学生。本作の主人公。劉二は魔獣の中でも異常な強さを誇る、絶将『イナニメトネス』に変身可能。しかし、魔獣を敵対視している学園内では変身するはずも無く、イナニメトネスの使う『絶現剣』を使って剣を創って扱えると認識させている。ちなみに、もう一本『滅幻刀』もあるがそれはまだ使わない。剣術は魔獣だけあって皆とは根本的に扱いが違う。いつもは順手で振り回しているが本気を出す時は逆手で扱う。

真鈴 梓沙（ますず あずさ）

アルラウネ内の『星聖学園』に通う茶色っ毛のロングの女性。本作のヒロインでしっかりしているが融通をきかせる部分もある。彼女の得物は『片鎌槍^{かたかまやり}』と呼ばれる槍の刃に一本垂直に伸びた別の刃があるタイプの槍を使う。その槍には退魔の力があり、振るうことで魔術を切り払うことが出来るらしい。他、相手の剣を刃の隙間に引っ掛けてその勢いを利用したカウンターなどどんな相手にも引けを

取らないとてもお強い方。と言うよりクラス内で一番の実力の持ち主。である。しかし、自分の実力を絶対に誇らず、日々訓練に励んでいる。

ヴァルド・レギオン（うゝあるど れぎおん）

『星聖学園』に通う大男。後ろで髪を結わいた極東風の顔立ちで性格は優しい。武術に精通しており、戦闘のスタイルも格闘である。右手にはガードが付いており、そこを使って守るほか、腕の重量が増加し重い一撃を決め込められるのだ。周りからは親しみを込められて『兄貴』と呼ばれたりする。ちなみに色恋沙汰には鈍い。

間日陰 相夜（まひかげ そうや）

学園の生徒で、大？吐きで周りから全くもって信用されていない七組の生徒。時々真実を言う時もあるが大抵は嘘なので紛らわしい。能力は特に無く、脇差し程度の刀を使うが弱い。はっきり言って、クラス内で最下位を彷徨ってたりするほどである。しかし、それにはれっきとした理由があつて……

アラス・クロフィード（あらす　くろふいーど）

またの名を『氷零のアラス』と呼ばれるほどの強者。その名の通り、氷に関する技をマスターしており、『凍零剣』を創りだすことも出来る。来れば地面を凍結させて相手の足元をすくったりもする万能型。しかし、彼女であるシェリアには一切頭が上がらない。てか、皆によくいじられている。が、やる時はやる男。

シエリア・オルタネイト（しえりあ おるたねいと）

またの名を『閃雷のシエリア』と呼ばれる程の強者。外見は金髪セミロングに緩いウェーブがかかっている。彼女は主に雷を操り、『雷撃槍』や広範囲落雷などかなりの腕前である。上記のとおりアラスと付き合っており、よくいじってたり言動奪ったりなどちよつと扱いがアレであるが、頼る時は頼る。

北川 芳弘（きたがわ よしひろ）

よくバイトしている男。語尾は大抵『ッス』。結構金にうるさく、迷惑がられるが買物などを聞くと正確にこたえてくれる。例えば、どの店がキャベツが安いとか、この季節に安く入る品物とか。

それもそのはず。彼の能力は『時は金なり』^{タイム・イズ・マネー}と呼ばれ、能力で一万円を使うと自分以外の世界を一秒間止める事が出来る。一瞬が勝敗を分ける世界にとって、一秒とは凄まじい時間である。しかし当たり前だが一万円はかなりの高額なので、能力はそう使わない。食費がかかっているから

因みに小遣い出すとパシリになってくれる。本人公認済み。

大原 薊（おおはら あざみ）

星聖学園七組担任の教師。軽くスーツを着崩したちよつとカッコイイ女教師。いつもはヴァルドや梓沙にクラスの仕切りを任せているがちゃんと授業はする。頭が良く、個人の練習メニューの作成など人を見る能力が高い。だけどたまにうっかりしちゃう人。

ルーイン・エンゼラート（るーいん えんぜらーと）

能力審査の女。通称『ルイ』。隠れファンの方が多く、話にちよくちよく出て来るかもしれない。

ヒュイヌ・リュリユー（ひゅいぬ りゅりゅー）

同じく能力審査の女。ルーインを先輩と呼んでおり、主に解析の方
に回る。やはりちよくちよく話に出てくるかもしれない。

火雅修大（かが しゅうだい）

星聖学園の校長を務める白髪の老人。常に礼儀正しい。劉二の親の
友でもちろん劉二の内訳を知っており、あえて学校への転校を許し
たのだ。静かに学校を見守る。

まだキャラは出てきますが、最初に出てくる重要(?)なキャラたちです

アルラウネにおけるキャラの紹介（後書き）

他にも出したいキャラはいます。それは本戦一回目とあとどっかのタイミングで出すと思います。

以上、十三でした

激闘、氷零のアラス！（前書き）

本戦です。

最近親友に『爆発』って『Fate』パクッただろとか言われましたが全くその点は気づきませんでした。お詫び申し上げます。
守備範囲が狭いもので

激闘、氷零のアラス！

いつでも、俺は夜にあの悪夢を見てしまう。忌々しき両親の変貌とそれに伴う『心』の消失。そして、隠された真実を見てしまった瞬間。俺が、この魔獣の身で両親を滅多斬りにして惨殺したあの時は必ず、嫌と言うほど毎晩現れる。

「……………ッ！……………はッ……………」

目覚めは最悪。もう慣れてしまったが。悪夢と共に劉二は起床した。ベッドから掛け布団がずり落ちている。劉二はベッドから起き上がり床の上に立つと布団を乱暴に戻しよく着る私服を手に取り着替えた。

劉二の通う『星聖学園』は珍しく私服登校が許可されている。考えてみれば当たり前かも知れない。物騒な物を振り回したり不可思議な現象を起こされた際の回避にいちごいち一々制服だと動きにくい。それ故におのれ己を最大限に引き出せる格好は何かと学園が考えた結果私服なのだ。

着替え終わった劉二。朝食までの時間はまだある。朝食は学食で食べる事になっているのだ。

「……………取り敢えず、顔を洗うか」

まだ顔を洗って無かったので洗面所に向かう。お湯を出し、手ですくってバシャバシャと顔面に浴びせていた時だ。意識の鮮明な覚醒と共に重要な事を思い出した。

「……！ああ、今日は本戦だ！」

昨日、突然宣告された戦闘^{試験}で何とか予選を勝ち抜いた劉二。今日は同じ予選を勝ち抜いた猛者達が己の強さに挑むべく奮闘する日。その猛者達の中には劉二自身も含まれていたのだ。

劉二は顔を洗い終わり、まだ時間がある事を確認し、更に周りにも誰も居ない事を一応再確認した後右手を突き出した。瞬^{まばた}きがし終えるぐらいの時間だろうか。既に突き出された右手には一本のシロく濁った水晶の長太刀が形成された。劉二はそれを右手で順手で持ち軽く振り回す。

「余り慣れないなあ」

正直な感想が口から漏れた。そしていつも使う太刀『絶現剣』は霧散する。別に刀自体が使いにくい分けでは無い。扱いが難しいのだ。この矛盾はいずれ分かるだろう。

「っと、時間か。行くぞ」

劉二は自室を一度振り返り忘れ物が無いか確認した後バックを持って部屋を出た。

その言葉は、誰に向けられたか……………

「はい、と言う事でホームルームを終わりにします。じゃあ、各自体育館に行くように！」

そう言って、薊は出席簿を持ち教室を出た。その薊の行動と共に教室は喧騒に包まれる。

学校内の学食で配布される朝飯を済ませた後、教室に入るとクラスメイトの半分くらいは集まっており、適当に話した後に自席に付き今日の戦闘^{試験}について考えていた。初めの敵は『氷零のアラス』と言われる氷の使い手だ。太刀一本で済ませられるか分からないが適当に考えていたら気づいたら寝ていたらしく、担任の薊先生が教室のドアを開ける音で目が覚めた。

薊は今日の流れを説明した後各自体育館に集合するようにと生徒に言い、自分はチェック表を取って来るついで体育館に向かうの事だ。

「さっさと行くか……………ん？」

劉二は椅子からのっそり立ち上がり、教室を出て曲がろうとした時だ。ふと、教室の隅の方に軽く人だかりが出来ていた。劉二は立ち止まり教室内には戻らず顔だけを向けて見てみた。よく観察すると『氷零のアラス』こと、アラス・クロフィードとその彼女である『閃雷のシェリア』こと、シェリア・オルタネイトを取り囲むように予選に落ちた、特に劉二に負けた魔術師女子二人とあの鉄円盤^{メタルディスク}の男が話している。魔獣の力で聴力を格段に上げて聞いてみた所、

「くっそ……………なあ、アラス。良いところ見せてあの転校生倒してくれよ！」

「もうあと少しだったのに………シェリア姉さんぎゃふんと言わせてやって!」

「もーマジ最悪うー。絶対勝ち抜いて欲しいんだけどー」

どうやら五和田劉二を倒して欲しいと、応援している様だ。正直、聞いていて複雑な気持ちになる。一方、頼まれたお二人方とは言う
と、

「あ、ああ……頑張るよ」

「ふん。あんな奴私の前に立つなんて百年早いわ!」

「しえ、シェリア………言い過ぎじゃね?」

「最初から弱気持ってちゃダメでしょ!」

アラスは弱気、シェリアはかなりの強気だ。しかし、弱気のアラスにも目には精悍さが出ている。ますます複雑な気持ちになった劉二は顔を背け行こうとした時だ。

「どうやら、負けた奴らが悔しくて勝ち抜いた皆に頼み込んでるらしいッスよ」

後ろから声を掛けられた。その語尾で劉二はすぐ誰だか判断できた。

「あ、ああ。北川か」

「普通に芳弘でいいッス」

北川芳弘。このトーナメントを辞退した後片付けやフィールドの整備などに励むクラスメイトだ。御親切に自分が聞いていた事を教えてくれた。

彼は戦闘に向いていると言えは向いているのだが向いていないと言えは向いていない。そこで、校長の修大と担任の薊と話し合い、結果この学校の生徒であり中でいろいろ雑用に回ることによって評価を得ていることになっている。

彼の家の事情は辛い。親が離婚し、離婚した父親の残した借金を押し付けられ、それに苦しんでいるのだ。母親が朝から晩まで働いても追いつかないので成長した芳弘はこの『星聖学園』の中で事務雑用、所謂『バイト』と呼ばれる事をして学費、そして寮生活の費用を賄まかなっているのだ。劉二並みの苦勞人である。

「で、敢えて聞くけど、自信の方はどうッスか？」

「うーん。相手が氷使いと言う事もあってかなり苦戦しそうだけど、何とか勝ってみたいね」

「おお、凄いヤル気ッスね。オレも実は戦った事があるんスが……
……まあ強いッス」

「そうなのか？」

「いや、それはもう………」

最後意味が分からん。しかし、芳弘をもってしても強者らしい。時間を止める芳弘ですらキツイお相手と言う事だ。これでやる気は出て来た。

「じゃ、俺は体育館に行ってる。これからなんかあるのか？」

「これから校庭の花壇の整備とそれが終わったらもうトーナメントも終わってるはずッス。その使われた場所の整備ッスね」

「ああ……大変だな。もし俺が優勝したらジュース一本奢ってやつても良いぞ」

「マジッスか！？じゃあ是非とも頑張ってくださいジュースの為に！
………っと時間ッス。御武運を」

「じゃあな」

劉二はなんか変な契約をしてしまった。が、まあ良いだろうと思う。
劉二はそのまま体育館に向かった。

そして、時間になった。劉二は体育館で準備運動をしている。腕を伸ばしたりアキレス腱を伸ばしたり普通にストレッチだ。筋肉をあらかじめ伸ばしておかないと無茶な動きが出来なくなる。戦闘を勝ち抜く為には無茶な行動も必要である。というか相手が強ければ強いほど無茶をしなければならぬ。

「ぐ、ぐぐぐ………ふっ………」

勝ち抜いた皆が魔術の調整や剣の振りを確かめている中、変なスト

レッチをしている劉二は浮いているかも知れない。事実、何人かの生徒が劉二を見て笑っている。しかし、魔獣故根本的に剣の扱いが違ふ劉二にとっては仕方が無い事。周りの視線を気にせずストレッチしていると、少しの人は劉二と動きは違ふが腕を曲げたりしてストレッチをしている人が居る。恐らくヴァルドと梓沙だろう。思考が脳内を巡る中、薊が準備期間の終了を伝える。劉二は二番目に戦う事になっている。

「参考にしよう」

近くの、余り人が居ない場所に腰を降ろし一回戦を傍観する事にした。薊の仕込みだろうか？巨漢、ヴァルドと別の格闘家が戦うらしい。薊のおなじみ鋭い声で漢同士の熱き戦いが始まった。

一言で言うなれば、ヴァルドはその巨大な体に見合わず鋭いステツプで相手を翻弄し、隙を作り出し渾身の一撃を決め込むのが戦闘スタイルだった。更に怖いのが牽制で出しているであろう拳や蹴りが空を切る音がこちらまで聞こえている事だ。ハッキリ言って、一撃で決め合う戦闘だった。ヴァルドに殴られた男は吹き飛び、立ち上がりはするものの膝が盛大に笑っていた。一瞬でヴァルドは背後に回り、男の背中を軽く押しただけでも男は立てなくなっていた。

「次か。行かなくちゃ」

次はいよいよ劉二の戦いが始まる。劉二は、全力を尽くそうと思った。自分が超えなければいけない壁が目の前にある。自分の目的、魔獣自らを絶つならば自らを絶つ者を越えてゆけ。劉二は、ジャンクのを挟んだ所定位置についた。そして、少しして第一の壁『氷零のアラス』が対峙する。

「行くぞ、イナニメトネス」

その掛け声は誰にも聞こえず、聞いたところで誰にも分からない。

「御手合わせ宜しく頼む」

「こちらこそ」

敵と言っても礼儀は欠かせない。アラスと劉二はお互いに頭を軽く下げる。そして、アラスは手を掲げ『凍零剣』を創り出す。それを見た劉二は対抗。右手を突き出し『絶現剣』を創り出した。アラスは右腕を引きながら剣先を劉二に向け左手を剣の腹に添える。その構えに一切の死角無し。劉二の構える『絶現剣』の剣先は地面に向いており掴んでいる右腕に力が入って無い。左手はやはりただ添えているだけだ。

「……………」

「……………」

二人は睨み合う。今の二人に同じクラスメイトという感覚は無い。
超えるべきライバルだ。そして

「第二回戦、初め！」

薊が鋭い声を上げる。その声が聞こえた二人は、俊足を以てジャンクを跳躍一つで飛び越え駆け出した。

二人が行った動作。それは腕試し。愚直にも一直線にお互いはお互いに向かい走りあう。そして『凍零剣』と『絶現剣』が交じり合った瞬間、ガギイイインと、凄まじい音が体育館を震わせた。交じり合った刃は動かない。押し切るのが無理だと分かった二人。否、分かっていたのだ。そのまま二人はバックステップ。一旦距離を取り、

「行かしてもらおう……………！」

アラスが前に出た。劉二に向かって怒濤の剣戟を送り込む。その速さは止まらない。一撃必殺の袈裟斬りを叩き込めば細かく剣を動かし重心を崩す打ち方も叩き込む。その技は多彩にして精確。

「……………まだ……………だッ！」

劉二は送られて来る剣戟をかわし受け止め弾き返す。しかもただ防御に回るだけでは無い。防御の後の反撃を怠らないのだ。かわせば足元を掬おうと、受け止めれば重心を流して崩そうと、弾き返せばカウンターの一撃を決め込もうとする。それは正に攻防と呼べる危険にして美しい戦いだった。

剣の勝負は互角。否、このままの体力消費ではいずれ劉二に押されると判断したアラスは一旦大きく剣を弾き飛ばしそのままバックステップ。多めに距離を取った。そして、

「ゼロ・グランド
零の大地！」

その叫びと共に劉二の周りの地面が薄ら白くなった。本能的に劉二はダッシュで範囲を抜け出す。抜け出せた刹那、巨大な氷柱が白くなった地面から四方八方にまるで針のように飛び出した。

「おい、ちょ、死ぬだろこれ！」

「問題無い！当たった所で先に凍結する！」

何処が問題無いんだ。凍結の方がまずいだろう。しかし、アラスの言っている事は確かに真実。触れたジャンクは音を生まずに凍りついた。それを一瞬だけ劉二は確認し、魔法は危険だと判断。急いで距離を保とうとするが、

「甘い！」

アラスが左手元に氷塊を創り出し劉二の足元に投擲。先ほどの魔法からして一筋縄ではいかない。外れると思ってでも念のため回避する。

すると、着弾した場所が瞬間的に凍り付き、ありえない速度で氷の柱が出来上がった。あんな物食らっては打ち上げられて無防備になるだけ。劉二は反撃を捨て回避のみに専念した。

氷塊は正確に、執拗に飛来する。フィールドは氷の柱が縦横無尽に駆ける。絶対零度のジャングルの中、二人の戦い方が変わっていった。戦場は、地形から空間へ。氷の柱を走り、跳び、迎え撃つ。

しかし、氷上はアラスの思い通りになる一地形『フィールド』だ。圧倒的な素速さと怒涛の剣戟、強力な魔術の前に劉二は反撃する余裕すら失われている。この状況、打開する術はあるのか。劉二は考える。今考えると、剣一本で勝つ事は到底不可能。新たな業を使うしか無いならば、選択肢は三つ。『複製』『爆発』『逆手』。この無双に複製は不利。逆手は本当に最後の手段。つまり見いだすなら使える手は『爆発』。

「……所詮、そこまでか……………！」

「くっ……………！」

アラスの叫びはただの挑発では無い。それは、己が転校生を打破する喜悦と自分を超える人材では無い少々の無念さが混じり合う叫び。アラスは言われて来た劉二をいずれ倒してしまうだろう。徐々に動きに落ち度が出て来ている。ジリ貧だ。アラスは無情にも猛攻を止めない。そして、

「ぐッ」

遂に劉二が回避のバランスを崩した。アラスは氷塊を投擲する。回避で受け身を取ると一瞬動きが止まると判断。劉二は受け身を取ら無かった。その結果、

「があああああ！」

激痛の代償と共に氷の柱は回避成功した。しかし、致命的にも劉二の絶現剣はリーチ故、逃れられず凍結した。アラスは勝利を確信する。武器が無くなった今、畳み掛けるべし。アラスは右手に凍零剣、左手に魔術を構えて、氷の上を滑り更なる猛攻を繰り出した。

「凄いなー」

薙は声を漏らす。それは今劉二とアラスの戦闘の純粹な感想だった。

「先生、試合止めないんですか？」

隣に近づいてきた梓沙が問う。普通に考えれば、この試合は武器使用不可と体力を考慮してアラスに旗が上がるだろう。誰もが恐らくそう思っているはずだ。耐えかね無くなった梓沙が聞いたのだ。

「止める必要？無いわよ」

「武器が氷漬けにされた今、勝ち目があるの？」

薙は、ちょっと仄めかす事にした。

「実は彼、劉二君もルーイン先生のもと、能力審査を受けたのよ」

「それが？」

「そしたら、まあ吃驚な報告が来てね……………この試合でその内の一つが分かるわ……………最後に梓沙ちゃん」

「はい？」

「勝負、頑張ってね」

「は、はあ……………」

腑に落ち無い梓沙は試合を見ることにした。

扉の影にて寄りかかりながら見ていた間日陰相夜はフツと笑いを一つ吐く。

「転ぶ動作までもが作戦だなんて、笑っちゃうね」

その眩きは誰にも聞こえ無かった。更に、相夜は続ける。

「氷漬けにされた剣をどうするかな、劉二君」

アラスは逃げる劉二を着々と追いつめていた。劉二の逃げる方向がまるで分かる。行動パターンを読んだアラスは巨大な柱を背に四方を塞ぐように誘導。劉二は案の定、

「しまった!？」

逃げられなくなった。勝利は決定した、とアラスは思う。今、劉二は三方向が氷の柱、前方がアラスと言う状況になっている。確実に動きを封印するため至近距離で氷塊を投擲する事にした。氷塊の着弾と形成はほぼ同時。ならば左右するのは飛来時間。時間を縮めるべくアラスは剣を使うと騙すため腰に溜める格好で走って行った。劉二まであと二十歩もかからない。氷の上を滑るようにして移動するため一歩が長いが速度も高い。そのままアラスは駆ける。そして

激闘、氷零のアラス！（後書き）

十三です。じゅうぞうではありません
今回は氷使いの敵でした。まだ戦闘は続きます

五和田劉二の思い（前書き）

遅れてすみませんでした

五和田劉二の思い

「終わりだあ！」

アラスの敗北を示す宣告に、劉二は全力で答えてやった。

explosion
「爆発！」

アラスは全く流暢では無い英語を耳にする。『explosion』とは爆発の意を表す単語だ。何事か。アラスは氷塊を叩き付ける初動に入り決着が付くまでの刹那考える。その解答は、確かに足元に存在した。

「刀だ……………！」

刀だと、と最後まで言い続ける事は許されなかった。足元には、氷漬けにされた刀が一本。今、その刀は灰色の光を帯びている。これを目にした時、何が起るかは言うまでもなく分かる。決着の女神は必ずしもアラスに微笑んだ物では無い。自分を陥れ、自らの危険な状況すらも作戦と考えた劉二に向けられる物だったのかもしれない。

アラスは空中に身を投じている。否、投じられた。爆風による物

だ。氷塊を振り上げた瞬間、完全に不意を突かれた故爆風を対処しきれなかった。作戦に嵌った結果がこれである。アラスは地面を転がるまでの間、考えていた。自分の甘さ、そして相手の無謀な作戦、そして、あの刀捌き。全てを考え、彼は敗北をこう評価した。

「面白い……………!!」

アラスは、起き上がる頃には刀を突き付けられているかな、と思いつながら受ける身勢に入った。

その後、アラスの身体損傷と武器崩壊、そして劉二の刀の突き付けによって勝敗は決まった。劉二の勝利だ。しかし、勝利をもぎ取った劉二も身体はボロボロ。何を言うにも、まず至近距離の爆発に加え追い込められていた地形上爆風をモロに食らう立ち位置となっていたのだ。身を低くして最低限の処置は取ったものの氷の破片などでダメージは少なく無い。次の試合は明日。今日この状態ではさすがに無理があるだろうと薙の判断で決まった。

「えー、今日の試験進出者はこんな感じね」

七組教室内でのホームルーム。薊は今日の試験で勝ち上がった者の名前と明日の試験の相手を書き出していた。その中にはヴァルドや梓の名前もあり、そして

「……次は……まあ、そうだろうな」

当たり前と言ったら当たり前なのだろう。次の相手は『閃雷のシエリア』ことシェリア・オルタネイト。先の試験で撃破したアラス・クロフィードの彼女である。

特徴としては、軽くウェーブのかかった金髪で背が高く、呼応するかのように胸も大きいし足も長く細い。要するにスタイルは完璧。女として憧れる人も多いはずだ。個人的に言わせれば一つ残念なのがずっとジーパンを履いているところだろうか。ミニスカートとか履いたら凄い良さそうな気がする。

戦闘としてはアラスのように作戦を立てて狡猾に追い込むスタイルではなく、力と勢いに任せ押していくタイプだ。圧倒的な雷撃の前に折れた者も多い。

「じゃ、これでホームルームは終わり！あ、アラス君と劉二君は後で私の元へ」

一瞬、劉二はアラスに目を向ける。アラスも首を振っている事から何の事かは分からないようだ。疑問を持ちながらも号令は掛かる。皆は立ち上がり、礼を済ませたところでがやがや騒がしくなった。

劉二とアラスは教卓に行き薙の元へ。二人が着いたので薙は話した。

「氷の破片の掃除、芳弘君とやってきてね」

「……はい」

「……………分かりました」

今になって劉二は思い出した。この戦闘フィールドは芳弘が掃除をするのだ。確かに戦闘が熱くなったとはいえ、あの破片の掃除を一人でやらせるのは酷にも程がある。納得した劉二は机に戻り鞆を持って再び体育館に行くことにした。

「おい芳弘！」

「手伝いに来たぞ」

体育館内。アラスと劉二は箒で掃いている芳弘の元へ駆け寄る。
芳弘が手を止め顔を上げた。

「お二人さん、どうしたんスか？」

「ああ、掃除の手伝いだよ」

「派手にやってしまったんでな」

「成程……この氷の破片はアラスさんのものッスね」

「そういう事だ」

アラスが頷き、掃除道具の場所を聞いた。芳弘は近くにある縦長の箱を指差し、あの中に箒と塵取りがあると言った。二人は道具を取りに行き、手分けして大量に散った氷の破片を？き集めることにした。

無言で？き集めて数十分、ふと疑問に思った。この氷は魔術で作られた筈だ。ならば、一本人『アラス』の意思で消せるのでは無いか。思う先が吉日。近くで掃いていたアラスに聞いてみた

「それはだな……」

話を聞く所によると、この氷は自然界で出来た氷、即ち水を低温度で冷やし続けた際に発生する水分子の凝固による物体を媒介とし、水魔法を発動できるらしい。氷自体の量は少なくとも発動できるのだが氷が無いと発動できないらしい。

「これを見ろ」

アラスは腰についている筒を見せた。水筒にも見える金属の筒の中には氷が詰まっている。これを媒介とし強力な魔術や剣を生成していたのだ。まだ俺は甘い。いつか、媒介無しで魔術を成し遂げて見せる、とアラスは言った。劉二の超える壁は日々高くなる。聞く劉二の心境は複雑だ。そんなことを思っている内に掃除は終わった。日が、沈みかけていた。

劉二はアラス、芳弘と別れ寮の自室に戻って来た。夕飯は学食で済ましている。今日は本戦だけあって予選とは段違いに疲れた。べ

ツドに飛び込もうとしたが、

「……風呂」

風呂に入らなければいけない。最近シャワーだけで済ませていたがゆっくり熱めの風呂にも浸かりたい。そんなオヤジ思考の劉二はある事を思い出した。そう、この寮にはなぜか温泉があるのだ。温泉と言ってもそこまでは立派ではなく、銭湯と呼ぶにふさわしい。いつもは人混みを避けて行かなかったのだが、やはり行ってみたいと言う好奇心もある。そこで劉二は銭湯に入れるギリギリの時間帯を狙うことにした。日を越さなければ良いらしい。

「ならば狙う時間は十一時半」

しかし、現在時刻は夜八時。時間までかなりある。どうするか考えた挙句、外をぶらつく事にした。

「涼しいな……この世も捨てたもんじゃ無い」

呟いた所で、まだ十数年しか生きていない自分が何を言うんだと嘲笑した。今、劉二は広い学園内の寮を出た少し木のある場所を散歩している。夜風が涼しく、空には雲にかかった満月が輝く。否、

「待宵、まつよいだな」

そう呟いてみる。確かによく見ると満月にしては少し欠けている。満月では無いのだが。そこに、見知らぬ声が割り込んで来た。

「待宵ってのは、望月となる十五夜、八月十五日の一日手前の八月十四日の事を指すわ。翌日の十五夜の月を待つ宵の意。別名小望月よ。転じて、来る筈の人を待つ宵の事も指したりする。決して満月の一歩手前が待宵って事じゃ無いから気を付けてね」

声は後ろから聞こえてきた。驚きの解説力。あわてて劉二は振り返った。そこにはショートヘアの女の人が立っている。背丈は劉二より少し低く服装は半袖に上着を着ており、下はミニスカートと呼べるのかは分からないが短めのスカートだ。

「解説ありがとう。……ところで、どちら様？」

「私は荒月あらつきさへみ冴美。違うクラスの人よ」

「俺は五和田劉二。……もう知ってると思うけどね」

荒月冴美は壁に寄り掛かった。夜風で短い髪が靡く。劉二は立ち去ろうとした。一步を踏み出した時、

「……………ねえ、言葉って不思議と思わない？」

「はあ？」

思わず劉二は足を止めてしまった。荒月冴美はお構いなく続ける。

「物事にはすべてルールがあるわ。ポテトチップスはある人の嫌がらせから。サンドイッチはトランプしつつ食べ物を食べられるかという我儘な発想から生まれた物。全てをたどれば何かしらに行きつくわ。けどね、所詮人間。ただ一つ、辿れない物があるわ。そう、それが今私達の使っている『言語』よ」

「……………」

「言語だけは神の定めた掟。それは不可侵にして神聖な物よ。そして、言語には強大な力が隠されているわ。その力には人間には見えないけど、たまに姿を現すのよ。よく、この一言が心に打たれました、なんて言われているけどそれは言語の力。言葉自体に力はないけど、それを選び、並び替え、組み合わせる事によって強大な力が現れるわ。旧約聖書にも有るじゃない。初めに神は『光よ。あれ。』と仰せられただけで光を生んだ。こんな具合に凄まじい力があるの

よ。だけど……………」

「……………」

「もうこの力は薄れてきたわ。『大量の言語の出現』でね。旧約聖書創世記第十一章、バベルの塔の話よ。人類がバビロンに天に達するほどの高塔を建てようとしたのを神が怒り、それまで一つであった人間の言葉を混乱させて互いに通じ無いようにした。そのため人々は工事を中止し、各地に散った。こんな神話はご存じ？」

「そこまで詳しくは無いが、な」

「そう。で、その散った言語を使ってるのが私達今の人間。……残念よねえ。神のただ一つ定めた言語が使えないなんて。そう思わない？」

「別に」

「素っ気無いわねえ……まあいいわ。要するに、言葉には力がある。今は無い。それだけよ。長い話を聞いてくれてどうもありがとう」

「はあ」

何とも不思議な女だ。劉二はそう思い、また歩き始めた。冴美は見送る。劉二は、奥の方へと闇に紛れて消えた。

「……………」神の定めた言語は、今も存在するんだけどね」

冴美が呟いた途端、体から見た事も無い文字がボロボロと漏れ出す。それは誰にも読めない。否、読めるはずが無い。冴美の使う能力なのだ。神の定めし消滅した言語。万物を成す言語。それは、

「……………」
ロストバベル
『消滅言語』……………」

その呟きははたして文字なのか、声なのか。誰も見る者など居ない。

劉二は冴美と会話した後そのまま進むと結局また寮に辿り着いてしまった。まだ時間は十時。たった一時間半しか潰せてないかあの女相手に一時間半も潰せたのかどう考えるかはご想像に任せるとしよう。しかし、残りが一時間半残っている事に変わりはない。はてさてどうしたものか。劉二は思考する。訓練するにも体力と言う物が有るし、夜の散歩はなんか気が滅入ってする気が起きない。このまま寝れたらいい、とは思うものの風呂に入って無い体はそのためスイッチが入っておらず眠気はまだ来ない。

「……ああ、そーういやCD持って来てたな………」

ふと思い出して旅行用のバッグを漁る。手にしたものは三枚のCDとプレーヤー。これは気に入ってるちよつと古めのロックバンドのCDだ。バスドラム重視な低音系今時ポップな曲が流行っている中、ロックは少々薄れてきている。今のロックだってそこまでメリハリが無い。だから劉二はこの昔のロックバンドが好きだった。豪快にして大胆なドラム。それを後押しするようなベース。そして、曲を彩るエレキギター。

「俺の、親父の趣味立ったんだけどな………っと」

コンセントにプラグを差し込み、起動したのでCDを読み込ませる。劉二は時間までの間音楽鑑賞で潰すことにした。

「あ、ちよ、音量デカイ………」

現在時刻は午後十一時半五分前。ガラリと扉を開ける音が誰も居

るはずの無い浴場に響く。見渡すと、シャワーが十五台ほど。そして、大きな浴場、温度は四二度位だろうか。少々温め^{ぬる}の浴場が一個、近くにサウナと小さな水風呂があった。学校にしては豪華すぎる設備。しばしその眺めに呆けていた劉二だが、皮膚が夜中の寒さを感じ自然と足がシャワーの方へ向かっていた。とりあえずコックを捻り水を出す。流れる水からは蒸気が上がり、温度がある事を示す。温かい。劉二は純粹にそう思う。そのまま頭からシャワーを被り、濡れたところでお湯の方へと移動した。

「……………ふい……………はあ……………」

浸かるお湯は熱く無い。だが、疲労を取るにはこの上無い温度だ。皆はこの温度を『丁度良い』とでも言うのだろうか。そう思考していた所で劉二は気づく。劉二は、まだ自分を認めていない。劉二は、まだ自分が『人間』である事を認めていない。だとしたら『皆は』なんていうことは無いだろう。なんて馬鹿な事なんだ。劉二はお湯に空を顔に向けて浮かびながら考える。空には、点々散らばる過去何千年何千万年から光を放ってきた星が輝き、望月に満ち足りない月が照らす。

「……………」

劉二は空を見つめる。その目に映るのは星の光で無い。忘れる事すら許されない出来事、あの日、全てが分かり全てを失った日だ。優しかった母と、逞しかった父。それがいつしか、あの見たくも無い忌々しき魔獣となったあの日。劉二の頬がキラリと輝いた。それ

は水滴では無い。月光が、劉二の涙を反射したのだ。

「……俺は、両親の為に何か出来ただろうか……………」

そんな心の呟きを吐いた。しかし、言った所で過去の事実など変える事なんて出来ないのだ。過去を認めずして今を生きられるか。生きるためには、過去を認めざるを得ない。劉二は底に尻を付け座った後お湯でバシャバシャ顔を洗い、涙を落として立ち上がった。髪から水滴が滴り落ちる。しばらくその光景をぼんやり眺めた後、顔を振り思考の中身と水滴を振り払って浴場の扉に向かった。

シェリア・オルタネイトは、部屋の中をうろついていた。何と言っても今日の試験戦闘の事である。彼氏もアラス・クロフィードが転校生、五和田劉二に敗れてしまった事だ。

「……はあ……………」

あの戦術、あの大胆な行動、自らを陥れる勇敢さ。全てをとって

も抜けている所が無い。しかし、自分の彼氏が負けてしまった所で彼女たるシェリアが黙って見過ごす訳が無い。幸いにも担任の薊が気を利かせてくれたのかどうか知らないが転校生の五和田劉二と当たる事になっている。

「どうするよ……どうするよ私………」

どうしようもなくうつっていた。明日の事が気になって仕方が無い。勿論恋愛沙汰では無く『敵』としてだ。相手は相当の刀の使い手だ。しかも刀には爆発能力があり、無くなった所ですぐに再生出来る。ただ、劣る事と言えば刀は同時に一本しか作り出せ無いらしい。事実、戦闘を鑑賞して分かったのが刀は常に一本だった。

「……ああもう！」

やはり戦法や戦術など考えるのはシェリアの思考に合わない。勢いとの力量で勝ち抜くのが自分の主義。難しい考えを止め、ベッドに飛び込んだ。やはりテンションの増加の為だろうか。眠れやしない。そのままゴロゴロ転がりながら夜を過ごしていった。

寮に戻ってきた頃には深夜零時を二十分前後過ぎていた。劉二は時計を確認し、睡眠時間は大丈夫だと自己完結したのでベットに潜り込んだ。

「強いんだろうなあ……」

そんな、一抹の不安を抱えながら。

五和田劉二の思い（後書き）

こんにちは。十三です

最近他のユーザー様の書かれた小説も読んでいますが、自分のレベルの低さが分かります。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします

爆裂する雷と（前書き）

送れました。すみません

爆裂する雷と

彼ら彼女らがどんな思いをしよう、またその思いがどんなに嬉々とした事であつても絶望する事であつても日は落ち過去から光を放つ星が煌めき、やがて空は藍色から白が混ざり日は登る。それは自然の摂理にして人の日常を支えるとても大事な自然現象だ。

「ハイ、これでお終い！各自体育館に移動してね！」

七組教室内。いつもの朝のホームルームである。さすがに三日も

連続して戦闘するのは慣れてきたが疲労は残るもの。担任である薊が出席簿を持って教室を出て行った。大方のクラスメイトは立ち上がり今日行われる試験戦闘を見るための場所を取りにさっさと移動してしまう。決勝近くなると皆訓練よりも他の者たちによる熾烈な戦いを見ようとするのだ。

結局、取り残されたのは訓練する数少ないクラスメイトと劉二ぐらいだった。

「……………」

此処にいても何の意味も無い。さっさと体育館に移動する。

「……そういえば、」

校舎一階廊下にて劉二は一つ疑問に思った。それは、自己紹介の時だ。記憶は曖昧だが確か自分の姓名の漢字を表す際に

『劉備玄德の劉に……』

と言ったはずだ。今は亡き親にそう言えば分かると言われていたのでずっと今まで紹介する時にはそう言っていた。しかし、

「……………劉備玄德って何？てか、誰？」

その劉備玄德を劉二は知らない。果たして、それは誰なのか。何をした人なのか。考えたって零から答えを見出すのは不可能な話。結局、蟠^{わだかま}りを抱えたまま体育館に向かった。

もう三回も来れば勝手に慣れて来るお馴染みの体育館。中央に空間があり、その周りにはジャンクが存在する。

今回の相手はシェリア・オルタネイト。『閃雷のシェリア』の異名を持つ女だ。情報によると雷を扱う事に長けているらしい。されど百聞は一見に如かず。聞いた情報なんて正に氷山の一角だ。この目この身で確認しなければならぬ。劉二はストレッチをして体を伸ばし、剣を一振り。使い慣れないのは仕方が無い。劉二はそのまま定置につく。そして相手が位置に着いた。

「O n Y o u r M a r k……」

薊の声が聞こえる。劉二の視界には目の前の倒すべき敵、そしてジャンクの広がるステージしか映って無い。

「Get Set……」

全神経を体中に張り巡らす。細胞の一つ一つまでもを臨戦態勢に持ち込む。世界がスロー再生されてるかの如く全ての動きが視える。

「……Go Ahead!!」

空気を震わす音の情報体が聴覚から神経を通り、脳が認識し理解した瞬間、二人は走り出した。

劉二は走りながら右手に一本の剣『絶現剣』を創り出し、愚直にそのまま横薙ぎに振り抜く。そのリーチはシェリアに届いた。シェリアだって負けてはいない。創り出した『雷撃槍』を片手に持ちその刃と刃を交えていく。これは戦闘では無い。初めの単純な力比べだ。凄まじい音を繰り広げ後ろに大きく跳躍。二人は一瞬笑う。そして、本当の闘いが始まった。

先手は、シェリアだった。シェリアが槍を一振り。その瞬間、目の前が光る。本能的に劉二は右に跳躍した。刹那、先ほどまでにいた場所の前のバイクの残骸らしきジャンクが帯電して吹っ飛んだ。

「爆雷！」

劉二は鋭いシェリアの声を聞く。目の前が白い。初め、劉二は何が起こっているか分からなかった。しかし、理解できる事は一つ。宙を舞っている事だ。訳が分からぬまま体勢を立て直し地面に受け身を取ってその勢いで起き上がる。

「……………！」

地面を見ると黒焦げた跡があった。劉二は予想する。恐らく、声通り爆裂する勢いの雷が着弾し風圧で吹き飛んだんだろう。

戦闘は常に無常。またしても爆雷の声が連続で聞こえて来た。劉二は右に跳躍し左に跳躍し徐々に距離を詰めて行く。ジャンクの吹き飛ぶネジが頬を擦り、鉄の破片が空を切る。切り傷から出血してもそれを無視して距離を詰め切り剣を振りかぶった。彼女は、笑っていた。

「!？」

気付いた時には既に遅い。振ってしまった剣の軌道は変わらない。片手で持っている『雷撃槍』に弾かれた。追撃は終わらない。シェリアは左腕を伸ばし劉二を掴んで、

「はッ！」

零距离から雷撃を撃った。

身を貫く電撃、迸る閃光と共に劉二はジャンクに背中から突っ込む。壊れた四輪駆動車のボロボロのシートが衝撃をある程度和らげてくれた事が幸いだろうか。劉二は一息でジャンクの裏側に這いずり出ようとした。刹那、微かに逸れながら隣のジャンクに爆雷が貫き、部品を外側にぶちまける。劉二は急いで裏側に出てきて右に跳躍から伏せた。バゴン、バゴンと次々にジャンクを貫いて襲う爆雷は執拗に狙う。

半周回った所で劉二はフェイントで剣を上に取り投げる。無駄だ。劉二はあらかじめそう思いしダッシュを止めない。しかし、予測は外れた。雷が放り投げられた剣に直撃。回転しつつ劉二を通り越して地面に刺さる。劉二は、その一連の事象を逃さなかった。今の一瞬のシェアリアの表情、そして魔獣眼による爆雷の方向ベクトルから。さらに、自分の持つ敵に見せてい無い技を使うことで、

「……いけるか?」

勝つ見込みはそれなりに低いが無い訳では無い。むしろ勝率があると思えば俄然やる気が出る。劉二はこの状況を打開すべく行動に出た。

予想外だった。ジャンクの裏に潜んでいるであろう劉二に向けて爆雷を撃ったはずが完璧にフェイント、もはや気の紛らわしにすらなっていない剣に当たってしまったのだ。しかしこんな事態に気を取っている余裕は無い。そう判断付け爆雷を撃っていく。

「……………」

おかしい。何かがおかしい。狙った方向に撃っても、同じ範囲にしか爆雷が突き進まない。否、三通りのパターンしか無い。そう思い始めた瞬間、

「！」

後ろに気配を感じた。本能的に背後を見ずに雷を落とす。

「……バレたか」

案の定、彼がいた。しかし、これでは謎が深まるばかりだ。彼を狙っているのに三方向しか届かない。彼はこういった絡繰りを使い、ここまで接近して来たのか。脳の片隅にその疑問を置いたときながら、今は倒すべき敵に集中する。距離は十メートル弱。こちらの損傷は零。対する相手は多大では無いが確実にある前の方法を使えば次で片づけられるだろう。だから、

「前の繰り返し、よッ！」

振り向き様に雷を撃ち出した。劉二は、前と同じ動きをしなかった。こちらに向かって走り、

「！」

劉二は、半分賭けの勝負に出た。もし予想が正しければ、彼女の雷は『絶現剣』に反応する。更には雷の貫通を止める効果もあるはず。それを仮定とした上での戦法だ。

「うおおおおおお！！」

声を上げて劉二は走る。目測で約七メートルの距離でシェアの腕に雷が纏う。その瞬間、劉二は何も言わずに持っている『絶現剣』

を十本以上複製。そのまま軽く斜め上に纏めて撒いた。剣はそのままばらけながらも劉二とシェリアの間にバリケードが出来た。劉二はそのまま身を低くしバリケードの下を掻い潜る。そのまま走り続けて

「……じゃあ！」

一閃の爆雷が劉二の背中を通過しシールドを粉碎した。

劉二は走ったまま手元に二本複製。シェリアに向かい右の剣を横

に薙ぎつた。シェリアは一步後ろに下がり剣戟の範囲から逃れ槍を突き込む。右足に掛かる体重をずらし、右に傾きながら点移動の槍の範囲を回避。そのまま右の刀を離し手を地につけバランスを調整し立ち上がった。既に剣は右手に握られている。シェリアはかわされた事を悟りそのまま右に体を向けると同時に槍で一閃しようとした。そして、

「……………あ！」

左の剣に槍を阻まれ、右の剣に槍を弾き飛ばされた。雷撃槍はシェリアの手元から離れると一瞬光り霧散した。雷を固めて作っているのだから当然の結果と言えば当然だ。

「く……………ッ！」

シェリアは一步後ろに跳躍。再び雷撃槍を形成しようとした時だ。踵にコッソンと硬い物質が当たった。そのまま視線を向けてみると、

「……………あ……………」

劉二がバリケードとして使った十数本の剣が落ちているではないか。更に、全て淡い光を放っている。これは忘れる訳が無い。彼氏であるアラス・クロフィードの敗因である『爆発^{explosion}』だ。これは即ち

「……………降参だわ。ずるいじゃないの、その剣複製できるなんて」

敗北を意を表す。

「と言う事で、明日は最後の試験戦闘になります！みんないいもん見られるからよく目に焼き付けておくのよ！特に今回はね！！」

そんな感じでホームルームは終わった。黒板には明日の決勝戦の対戦する者の名前が書いてある。と言っても、当たり前だが二人し

が無い。そこには、五和田劉二の名と真鈴梓沙の名前が白いチョークで記してある。

教室内は依然としてざわめいている。初めてやって来た転校生がこのクラス、ましてや学年のトップを争うレベルの真鈴梓沙と勝負をするだなんて皆から見れば奇想天外の驚愕的な事実到他ならない。今教室内では劉二の周りにもちらほらと人が集まっているが大半は梓沙の元に集まっている。今劉二の近くににいるのは、

「いやあ、有名ッスねえ。色んな意味で」

「それ言うな芳弘」

バイト高校生の北川芳弘、そして

「しかし、よく此処まで登り詰めたな。今までどんな生活して来たんだよ。色んな意味で」

「そうよ。なんつー剣使い方。ハッキリ言って滅茶苦茶よ。色んな意味で」

「分かったから最後の文統一するな！」

先日戦ったアラス・クロフィードと今日の試験戦闘の相手、シェリア・オルタネイトだ。確かに劉二の剣の扱い方は異常だがそれは自分の

身の関係上仕方が無いでしか済ます事が出来ない。

「まあ過去の話はまた後でにして……で、なんで俺はなんか恨めしい存在になって来ている訳？」

周りに耳を傾けていると数々の声が聞こえるが殆どは劉二の、よりによってあまり良くない評判の声だ。『あそこまで強いと……ねえ』『てか、戦い方滅茶苦茶だよな』『どういう神経してるの?』『しかもまだ技隠し持ってんじゃねえの?』『なんか、セコいよね』など。

「そりゃあ、あんたこの私達を易々と撃破してくれたもんだからねえ」

「……………えー」

「劉二さん、まさか女の子達から『何あの強い人！カッコいい！』なんてキヤーキヤー言われる感じの妄想でもしていたんツスカ？」

「それは無い」

「本当は？」

「少しあっ……………おい！」

危うく、と言うか既に遅かった。アラスの一言に乘せられてしま

った。我ながら後悔する事だ。確かに、そんな事が起きてほしいと言う想像は少しはあった。

「ま、その内友達増えるツスよ。きっと」

「内心、話してはみたいが皆圧倒的なお前の強さに引き気味、と言うのが現状だな」

「いきなり転校生が此処まで頑張るのもアレよねえ」

「お前ら厳しいな！」

実はもうこのまま孤独の身では無いかと心配になって来た劉二だが芳弘が時計を見て

「あ、バイトの時間ツス」

の一言でこの雑談らしき物は解散となった。

試合はその通り劉二の勝利で収める事が出来たが損傷度合は劉二の方が上だ。何とも複雑である。

「今日も疲れたなあ……まだ痺れが取れん」

校舎内を歩いている劉二が呟いた。劉二は腕を伸ばしたりアキレス腱を伸ばしたりするが今日食らった雷の痺れが未だに残っている。恐らく明日にでもなつてれば取れはするんだろうがやはり違和感が付き纏いいい感じでは無かった。

「おお……着いた着いた」

劉二が校舎内を歩いていた理由が目の前にある。扉には『星聖学園図書室』と書いてあった。朝の疑問を帰りのトイレで思い出したのでどうすればいいか悩んだ結果、最初に出てきたのが此処だ。図書室に参考文献でもあるかどうか探してみようと思ったのだ。

「……失礼します」

劉二は重そうな扉を押し中に入った。

室内は広く、三分の一が机やテーブル、コンピュータなどの作業スペースで、残りがぎっしりと本が詰まった巨大な本棚で埋まっている。着いたものの劉二はどうしたら良いか分からなかった。なんせ莫大な本の量を相手に自分の探したい情報は何処にあるか見当もつかない。しかも、検索機能は無く表示は『あゝお』などの分類で

何についてなどの分類はされていない。

「……………うわぁ……………」

本棚目の前に立ち尽くす劉二。そんな時、後ろから肩を叩かれた。振り向くと、劉二より少し背の高い黒髪の、腰にまで伸ばした女が二冊の本を持って立っていた。

「……………これ」

劉二は持っていた二冊の本を手渡された。どうやらその二冊の本はここあたり周辺の地域の歴史についてとこの大陸の歴史についての本らしい。思わぬ所で欲しい情報について書かれていた本を手渡された。

「あ、ありがとう」

「……………来て」

劉二のお礼は無表情で返されたのち、こちらに来いとの指令が来る。黒髪の女はそのまま作業スペース奥の貸し出し場所に向かっていった。慌てて劉二はついて行く。

「もうすぐ図書室閉まるから、貸し出しにしておく。それでいい？」

「ああ、構わないと言うかそうしたかった……」

「じゃ、ここに名前を書いて」

劉二は渡された名刺サイズの紙に『五和田劉二』と書き込む。これで手続きは完了らしい。

「期限は一週間まで。遅延は厳禁」

「……分かった」

劉二は思った。なぜこの女は自分の探そうとしていた本、そして貸し出しをしたかったなどの自分がしようとしていた事が分かるのか。さすがに此処まで来ると不自然だとは思ってしまう。

「……私は朱里^{あかりねさす}称沙洲。あなたと学年は同じで図書委員をやっているわ。大体は『フィロソフィア』で私の事は通る。能力の関係上、大方したいことは分かるわ」

「は、はあ………俺は五和田劉二だ」

思わぬカミングアウトを受けた。『フィロソフィア』で通ると言う事は能力名が『フィロソフィア』なのだろうか。

「……違うわ。能力は『スーヴニール』……そろそろ時間だから出て行ってくれる？」

「あ、ああ……」

結局、分かった事は能力名が『スーヴニール』で通称は『フィロソフィア』、本名が『朱里称沙洲』ぐらいだ。能力がどんな物かは分からなかった。

寮に帰って部屋で読んだところ、この大陸は昔は次元が不安定だったらしく色々な伝説が混ざりこんだ。と言うのが有力説らしい。詰まる所正確には分かって居ないのが事実。そして、劉備玄德とは昔に別の地域あたりを無双していた武将で、諸葛亮孔明と言う人との策略によりこの大陸を鼎立させたらしい。劉二の理解能力はそこまで位しか分らなかった。難しい字の羅列が多すぎてベッドで読んでいたら途中で寝ていたらしい。気づいたら朝だった。

「……………今日は決勝戦か……………」

脳の知識に劉備玄德と諸葛亮孔明の事は格納されたかどうかは謎だが、今は最大の敵が待ち構えていた。その敵を倒すべく、劉二はベッドから出た。

爆裂する雷と（後書き）

十三です。多忙により遅れました。

『フィロソフィア』に『スーヴニール』なんてあの姉妹……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6931s/>

魔獣士戦録アルラウネ

2011年10月8日20時52分発行